

佳作

私の絵の世界

山形県寒河江市立陵南中学校

3年 大瀧 桜愛

シャープペンシルを握りしめ、スケッチブックに線を描く。たったこれだけのことで、私は私の世界をつくり出す。

私が絵を描くようになったのは、美術部に入ってからだ。入った理由はいたって単純。仲の良い友達が入ったからだ。入部して私はすぐに後悔した。部の中には背景を描くのが得意な人もいれば、人物を描くのが得意な人もいた。周りの人は皆、絵が上手だった。私は焦っていた。私には何もなかったのだ。絵を描くセンスが特別にあるわけでもなく、自分が好きな絵なんてどうせ描けない。そう思っていた。

それでも絵を描き続けたのは、絵を描くことが好きだったこともあるが、一番は絵を描く自分が好きだったからだ。スケッチブックにシャープペンシルを走らせ、どんな絵を描くのかも決めずに、ただ描くことを心の底から楽しんでいる自分自身が、私の絵を描く原動力となっていた。

描き続けて感じたことは、絵には才能とアイデア、そして知識が必要だということだ。どんな構図なら人をひきつけられるのか、どう描いたら命が宿るのか、絵を描くために必要な知識を頭に詰め込んだ。

才能のある人たちも、努力していることを私は知っていた。だから、私はその何倍も努力して差を埋めようとした。けれども、いつまでたってもその差は埋まらないままだった。がむしゃらになって絵を描いているうちに、どんどん時間だけが過ぎていった。

中学校に入って3度目の春、いよいよ最終学年が始まり、受験を視野に入れて勉強に取り組んでいかなければならない時期が訪れた。あんなに必死に描いていた絵は、部活動を引退してからはあまり手につかなくなってしまった。

希望している高校、そして高校を卒業したその先、自分が何をしたいのか、明確なビジョンというのが私にはいまいちわからなかった。絵を描き続けたいという思いはあったものの、絵を仕事にしていけるのはほんのひとにぎりで、需要のある絵を描けなければ仕事ももらえない不安定な仕事がほとんどだったからだ。憧れていた絵師さんもいつの間にか見なくなった。少しでも気を抜くと、作画がひどいやら、好みではないと言われてしまう厳しい世の中だから、自分には無理なのではないかという気持ちが膨らんでいった。

そんな私に転機が訪れた。ある日の夕方、ひいおばあちゃんの家に行った時

のことだ。何をしに行ったのか今ではもう思い出せないが、ひいおばあちゃんの話したことだけは鮮明に覚えている。

ひいおばあちゃんは私と目を合わせてこう言った。

「のびのび生きたらいいんだよ。」

私はうれしかった。他の人からしたら、なんだ、それだけかって思われるようなシンプルな言葉だったけれど、私にとっては思い出だけで涙が出てくるくらい、うれしい言葉だった。私はずっと、決まった道を歩かなければならないのだと思っていた。私は心のどこかでその言葉を待っていたのかもしれない。

その日の夜、私は久しぶりにスケッチブックを開いた。真っ白な世界に、1本の線がのびていく。左右非対称の線だって、生かせば唯一無二の線となり、絵となる。実際にはありえない構図だっていい。私が描くのは、私の世界。どんな人生を送っているのか、どんな悩みを抱えているのか、どんなエピソードがあるのか。私の手で描く人物たちとの対話で、他にはない私だけの世界が生まれる。いや、私と描かれた人物たちとの世界が広がる。その瞳には何が映っているのだろう。その手は何に触れてきたのだろう。私の絵の中に、何を求めているのだろう。

いくら絵を描いたって、才能ある人たちにはかなわない。その差は埋まらない、縮まらないかもしれない。やらなければならないことは毎日のように増えて、つらいこともあるけれど、私は好きなことをして、のびのびと生きていきたい。私は絵を描き続けたい。私の世界をあきらめたくないから。